



遊佐町 / 中山河川公園

雪解けの川音と歩む 桜並木の先へ

 荘内銀行

Cradle

春号

出羽庄内地域文化情報誌「クレードル」

令和8年4月1日発行  
2026 Spring vol.90

発行 / Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15 株式会社 出羽庄内地域デザイン | 電話0235 (64) 0888  
制作 / Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3「コトツク・コミュニケーション」 | 電話0234 (41) 0012

春、動き出す一人一人の物語

# Cradle

出羽庄内地域文化情報誌 [クレードル]

春号

vol.90  
2026 Spring

特集

## 女性たちの人生譚



ご自由に  
お持ちください  
TAKE FREE

左内への手紙  
[8通目]

# 拝啓、庄内平野様

書体設計士  
鳥海 修



上蔵岡の鳥海山大物忌神社、蔵岡口之宮参道の石段

私は、アナタの北端、鳥海山の麓の小さい山の小さな村で生まれ、18歳までここで育ちました。高台からは一面に広がる田んぼと、その彼方に防砂林が見え、さらにその先には日本海が薄く見えまし。春は水を張った鏡のような田んぼ、夏は風に揺れる稲の葉、秋は黄金色の稲穂と紅の鳥海山。子どもの頃の日向川での魚捕りや秋のアケビ採り、それに12年間、通学のために往復した500段の石段、そのすべてがアナタの懐の中でした。

冬の高校への通学路は厳しいものがありました。貧弱な防寒具をまとい500段の石段を下りて、預けてある自転車で約10キロの道程を、北西から吹きつける強烈な地吹雪にあらがって通うのですが、時には走行中にも関わらず、車輪とブレーキの間に溜まった雪が凍結し、突然ロックして転倒したりするのです。時には下校の際、強い風に押されて、まるで帆掛け船のようにペダルを漕がずに石段の下までたどり着くような楽しいこともありました。あまりの荒天時は近所の先生の車に乗せてもらうこともありましたが、3年間、ほぼ自転車通学したことに、「学校が卒業証書をくれなくとも、俺が卒業証書をやる」とは父の言葉です。その後は東京の美術大学を経てフォントを作る仕事に就きました。フォントと

いうのは言葉を記述する文字セットのことで、日本語の場合、漢字・平仮名・片カナ・英字・記号などから成り、1フォントあたり2万字強の文字を作ります。これらを数名のグループで作るとはいえ、一字ずつこだわって作るのですから根気が必要です。こうした地味な仕事を続けていられるのは、500段の石段と自転車通学とも無縁ではないかもしれません。この仕事に就きかけは、大学3年時の某新聞社の工場見学でした。その社員が描くレタリングの文字が驚くほど美しく精緻で、思わず「それは何ですか」と尋ねると、「活字の元だよ」と答えます。活字というのは本や新聞に印刷されているあの小さな文字のことで、それがまさか人の手によって作られているのだと、それまで想像だにしませんでした。から、まさに今、目の前で作られていることに大きな衝撃を受けたのです。書き手の言葉を、読み手に正しく伝えることを目的とした活字は、いかにふつうであるかとの観点から水や空気に例えられます。そして工場を案内してくれた方の言葉が私を捉えます。「日本人にとって文字は水であり、米である」。私にとって水や米や空気は、まさにアナタそのものであることに思い至ったとき、この仕事に就こうと決めたのです。

## とりのうみ・おさむ | 書体設計士

1955年山形県生まれ。書体設計士。游書体ライブラリーの游明朝体や游ゴシック体、ヒラギノシリーズなど、ベーシック書体を中心に150書体以上の開発に携わる。2022年京都dddギャラリーで個展「もじのうみ」を開催。著書に「文字を作る仕事」(晶文社、第65回日本エッセイスト・クラブ賞受賞)、「本をつくる」(共著)(河出書房新社)、「明朝体の教室」(Book&Design)がある。2024年第58回吉川英治文化賞受賞。私塾「松本文字塾」塾長。



鳥海修「もじのうみ」(2022.1.15~3.19 京都dddギャラリー) 展示風景



上段は鳥海さんが設計した「游明朝体ファミリー」の一部で、下段は「游明朝体R」約2万字字形の一部。

# 特集 女性たちの人生譚

120年ほど前の明治時代に庄内に生まれた女性たちは、変わってゆく時の中で、その人生に力強く根を張り、柔軟に枝を伸ばし、美しい花を咲かせました。限られた選択肢の中でも、自らの生き方を選び取った3人。

その歩みはけっして特別な人だけの物語ではなく

悩み、迷い、不安を抱えながらも一步を踏み出した、誰しもの先にある物語です。

この3つの人生譚が、歩き出そうとするその背中に

あたたかく寄り添ってくれますようにと願って、この特集をお届けします。



女性科学者のフロンティア

# 加藤セチ

北海道帝国大学初の女子学生、家庭を持つ婦人として初の理学博士、理化学研究所初の主任研究員。たくさんの「初」を成し遂げた加藤セチは、明治時代に庄内有数の大地主の娘として、現在の三川町に生まれました。



1893年、押切村(三川町)に誕生。山形県女子師範学校、東京女子高等師範学校を卒業し、北海道帝国大学入学。1922年、理化学研究所に入所。1931年、理学博士の学位を授与。1953年、理化学研究所で女性初の主任研究員就任。1960年、67歳で理科セミ開始。1968年、三川町から名誉町民第1号を贈られる。1989年、95歳で逝去。

北大時代、庄内なまりが残るセチは、愛嬌の良さもあって周囲から親しまれていたという。写真は理化学研究所にて。写真提供：北海道帝国大学文書館

三川町立押切小学校が創立150年を迎えた2024年9月、元中学校国語教師の長南征子さんが、「加藤セチ博士の生き方を学ぶ」をテーマに5、6年生に講演しました。昭和60年代に郷土に関する自主教材で授業をしていたという長南さんは、「セチさんの生き方を学ぶと、背筋がピンと伸びます。セチさんは自分がどうしたいのかをはっきりさせ、行動し続けました。道は意志があるところから開けます。セチさんは、研究と人生は同じとおっしゃるでしょう。セチさんの生き方を多くの人と共有、共感し、後世に語り継いでいきたいです」と話します。

## 家の破産を経て

加藤セチが押切村の加藤家に生まれたのは1893年。当時、父の正喬は祖父安興から引き継いだ羽黒町の川代山開墾事業と放牧事業を進めていました。しかしこの頃すでに経営が悪化。さらに庄内大地震によって押切の屋敷が倒壊し、セチの母と兄と姉が焼死するという悲劇に襲われます。正喬は失意のまま事業の再起を図りますが、子どもたちの学費も払えなくなり、セチは鶴岡高等女学校を中退。間もなく正



1936年、北大の後輩たちがセチを訪ねて理化学研究所に来た。セチは前列右から2人目。写真提供：北海道帝国大学文書館



長南征子さんが執筆を担当した教科書「道徳中学校3」「加藤セチと佐藤昌介〜決まっていることはない〜」(日本教科書)。

セチは決意して上京し、女子最難関校を受験。奨学金をもとに入学しました。

## 北海道帝国大学初の女子学生誕生

東京女子高等師範学校を卒業したセチは、北海道の北星高等女学校(現北星学園女子中学高等学校)で2度目の教師生活を始めます。しかしまたもや教師としての自分に至らなさを感じるように。その夏、転機が訪れます。修学旅行で札幌を訪れた東京の後輩たちを北海道帝国大学(現北海道大学)に案内した際、佐藤昌介総長の「北大は女子に門戸を閉ざしていない」との言葉を聞き、北大での学び直しを決めたのです。すぐに入学願書を提出しますが、検定試験を受ける前に却下され、セチは総長室の前に何日も座り込みを続けます。全科選科生での入学が許可されたのは、3回目の教授会が開かれた後でした。



母校の三川町立押切小学校ロビーにあるセチの銅像。創立100年の1974年、セチは児童の前で子ども時代の思い出を語った。



2024年9月に三川町立押切小学校で行われた長南征子さんによる創立150周年記念特別授業。子どもたちは自分たちの先輩であるセチについて熱心に学んだ。写真提供：長南征子

入学後、セチは女学校で働き続けながら、寝る間を惜しんで勉強しました。修了論文は鶴岡市羽黒町手向出身の園芸学教授、星野勇三の指導で作成しました。その内容が評価され、卒業後は北大の土壌分析を専門とする研究室で働くこととなります。

## 理化学研究所へ

しかし女性研究者としてのキャリアを考え、また、交際していた狩川出身の建築研究家、佐藤得三郎を婿養子として加藤家に迎えたことを機に、北大を退職して東京に戻ります。そして土

# 加藤セチプログラム



六義園心泉亭(東京都文京区)で開催されたセチの主任研究員着任祝賀会。前列中央がセチ。1953年、59歳。写真提供:理化学研究所

セチが1922年から38年にわたって研究を続けた理化学研究所は、時代を経た2006年、「環境資源科学研究センター鶴岡サテライト」を鶴岡市先端研究産業支援センター内に開設しました。そして理化学研究所には現在、セチの名を冠する女性研究者育成プログラムが存在しています。加藤セチを通してつながる庄内と理化学研究所。このプログラムについて、理化学研究所からメッセージをいただきました。

加藤セチは、1893年に生まれた化学者です。女性研究者の存在がきわめて限られていた時代に、苦学の末、分光学を化学分析に応用する研究の道を切り拓きました。

1922年に理研に入所。成果は実際に認められ、1953年には理研初の女性主任研究員に就任しました。



セチ作成の吸収スペクトルの資料。写真提供:理化学研究所

卓越した業績と後進の育成に貢献し、女性の研究活動の可能性を大きく広げたことで、日本、世界の女性研究者の象徴的な人物として位置づけられています。理化学研究所は2018年、加藤セチの先駆的な歩みにちなみ「加藤セチプログラム」を開始しました。「加藤セチプログラム」は、広い視野をもち、国際的に活躍する女性研究者を支援し、そのさらなる活躍を積極的に後押しする制度です。現在、加藤セチプログラムの支援を受けた多くの女性リーダーが、先進的な研究に日々励んでいます。



セチが使用した吸収スペクトルを測る分光器。写真提供:理化学研究所



理化学研究所環境資源科学研究センター鶴岡サテライトが入所している研究棟の廊下には、加藤セチの紹介ポスターが掲示されています。

加藤セチプログラム <https://diversity.riken.jp/>



羽黒町の桜ヶ丘から見下ろす川代山。「荒地を開拓し、牧場と養蜂を営み、ミルクとバターを作ってクッキーを焼く」との夢を胸に、祖父と父が開墾事業を進めた。写真提供:長南征子



加藤安興と正喬を祀る川代山の皇大神社は、セチが納めた鏡を御神体としている。写真提供:長南征子

壊分析の研究者を求めていた理化学研究所に女性第1号として入所。長男長女の出生を経て、家事と育児を支えてくれるキンと理解ある夫のもと、研究生活を送っていきます。そんなある日、物理の研究室で「吸収スペクトル」に出会いました。この方法を化学分析に応用できると考えたセチは、量子力学を勉強し、吸収スペクトルによる化学分析研究を進めます。その学位論文は国際的な評価を得、京都帝国大学からの理学博士授与に至りました。

その後、戦時下での内閣戦時研究員生活や息子の戦死を経て、戦後はクロロフィルの光化学的解明や抗生物質、制がん物質の合成研究へ。58歳で女性初の主任研究員となり、定年後は特別研究室嘱託として研究を続けました。「昭和になっても男女格差は教育制度をはじめいろいろな場面に歴然と残りました。セチさんはその格差を乗り越え、自分の力で成果を残しました。さらに多くの後輩女性を支援し、その中で4人もの博士を誕生させました」と長南さん。



ソ連訪問のためのパスポート写真。セチ71歳。写真提供:理化学研究所

1960年、最愛の夫を亡くしたことを機に退職。失意の中、もう一度勉強の出発点に立つて学ぼうと、女性の高校教師や若手研究者を集め、月に1度の「理科ゼミ」を母校お茶の水女子大学で始めます。途中から男性も加わり、15年間一度も休まず、無償で勉強会を続けました。山形新聞の「やまがた再発見」で、セチの生涯を連載で紹介した宮野悦夫さんは、その中で「参加者はセチの一言一句すべてに啓蒙される、『大学や研究室では学べないものを学んだ』と感動を口にした」と書いています。

## ふるさと庄内、三川町と

〈参考文献、資料〉  
長南征子「加藤セチ博士研究レポート」/『川代山部落史』/宮野悦夫「やまがた再発見 加藤セチ」山形新聞2022年5月22日、29日、6月5日号/  
加藤祐輔著「加藤セチと女性科学者たち」(玉川大学出版部、2025)/Web北海道マガジン「カイ」特集「北大最初的女子学生おせっちゃん」

日本の洋裁文化を育てた人

# 原のぶ子



1901年、飽海郡松嶺町(現酒田市松山)生まれ。共立女子職業学校(現共立女子大学)を卒業後、同校で教師となる。1934年渡仏。帰国後、「原のぶ子アカデミー洋裁」を設立、日本で初めてフランス式立体裁断法と洋裁教育を導入、後に法人化(現青山ファッションカレッジ)。1976年、勲五等瑞宝章。米沢女子短期大学名誉教授、松山町名誉町民ほか肩書き多数。96歳で逝去。写真提供：松山文化伝承館

フランスの洋裁技術を伝え、日本の洋裁教育と服飾文化の発展に大きな役割を果たした原のぶ子。その原体験となったのは10歳の頃。母を亡くしたのぶ子を祖母は機織り場に連れ出し、糸紡ぎや染め、織りの一貫した仕事を見せていたようです。松嶺尋常高等小学校の高等科を卒業したのぶ子は、教員を目指して尋常高等小学校の裁縫教師に。さらに学びたい思いから上京し、共立女子職業学校に入学。文部省の教員資格を取得し、同校で和裁を教える傍ら、洋裁に興味を抱きます。日々、熱心に教え学ぶのぶ子のもとにある時、学校の勧めに加え文部省からの囑託で、洋裁研究のためのフランス渡航の話が。また、恩師から現地に住む画家の原勝郎を紹介され、渡仏と結婚という大きな転機を迎えます。

のぶ子はパリの名門エコール・ラヴィンヌで本格的な洋裁教育を受けます。

日本ではまだ洋装文化の黎明期に、モード発祥の地フランスに学び、その服飾技術や洋裁教育を日本に伝えた服飾研究家の原のぶ子は日本の近代ファッション文化の礎を築きました。



1 1951年、酒田市立高等学校(後の酒田市立酒田中央高等学校)での「第1回 原のぶ子ファッションショー」。  
2 1986年、郷里・松山の農村環境改善センターでのファッションショー。  
写真提供：松山文化伝承館

日本では平面製図法の洋裁が一般的でしたが、パリでは人体や人台に布を当てて裁断する方法で、人体の形体と衣服との関係の理解を要するものでした。その後、戦争の影響で帰国を余儀なくされ、のぶ子は「フランス式立体裁断」の技術を持ち帰り昭和16年、「原のぶ子服飾研究所」を立ち上げます。皇族や華族をはじめ多くの顧客でにぎわい、昭和23年には移転拡大して「原のぶ子

アカデミー洋裁」を設立。同年には念願だった作品発表会「ファッションショー」を開催します。「西洋に学んで自国に還元したことは、戦後、何でもねずみ色になっていく時代に彩りと力を与えたはずです。周りの後押しや求めにも懸命に学んで応える人だったのだと思います」。そう話すのは、のぶ子の郷里にある松山文化伝承館の調査員さんです。

のぶ子は全国各地の学校での講師活動やファッションショー、再びの欧州視察など、意欲的にファッション文化の研究と振興に力を尽くします。地元



1981年 綿藍染平織 アンサンブル  
1980年 紬和服地 アンサンブル



1982年 木綿型染 ワンピース



1981年頃



1978年

写真は『原のぶ子 その作品 1954～1989』(源流社、1990)より。のぶ子は郷里でのファッションショーの際にこう話している。「衣食住の衣を広く海外交流に求めて深めて参りましたが、同時に日本古来の伝統を取り入れ、一心に取り組んでまいりました。(中略)細く狭い一筋の道でしたが、ふるさとに通じる道であることを今さらながら実感する思いです」。

酒田でものぶ子を講師に迎えて婦人会立酒田高等女学院が発足、昭和27年には米沢女子短期大学の創設にも携わり教授に就任。また同じ頃にデザイナークラブ「サロン・デ・モード」を創立し、日本の織物文化に光を当てた海外との文化交流やデザイナーの育成に力を入れます。少女時代、機織りの仕事を見ていたのぶ子が、歳月を経て日本の服飾文化の創造と発信に努めたのは必然だったのかもしれない。「日本の文化を世界に発信して評価を受けることができたのは、海外で学んだ経験から、海外にどうアプローチすればいいかという視点とセンスを持っていたからこそ。今よりも女性の活躍が抑圧されていた時代に負けず、自分の仕事に時代の先を見出していた。私はお会いすることが叶いませんでしたが、そんな方だったと想像します」。

〈参考資料〉  
原のぶ子編『原のぶ子 その作品1954～1989』(源流社、1990)／水戸部浩子著『山形の女』(「山形の女」出版委員会、1994)／原秋櫻子著『原のぶ子の生涯』(原書房、2010)／松山文化伝承館 企画展示資料 ほか



1 追悼公演「フィガロの結婚」より  
2 「加藤千恵先生の還暦を祝う音楽祭」  
3 市民オペラ第1作目の「ミカド」より  
4 市民オペラ「椿姫」より



しばらくは畑仕事などに勤しんでいた千恵でしたが、音楽への思いがあふれ、昭和21年、酒田・浄福寺の本堂を借りて、歌とピアノを学ぶ「ボーカルスタジオ」を開設します。後に自宅に併設したその教室には、幼児も大人も集うように。「私は小学3年生から通いました。先生ご本人が『私のお稽古は鬼ばばあみみたいに厳しい』と言っていたようにレッスンはすごく厳しい時期もありました。けど、コンサートの後は必ず『よかったわよ』って褒めてくれましたね」。夫の丈策が「千恵は教えることのが好きな人でした」と語ったその指導の行く先は、千恵を夢の実現へと向かわせます。「先生はオペラが大好きで、自称オペラ馬鹿というほどだったんです。公演を叶えるために奔走する姿を見て、みんなが協力して、街なかの商店主たちは持ち出しで支えました。先生の人柄がそうさせたし、先生がやることへの絶大な信頼感があったんです」。そうして昭和31年、東北で初とされるアマチュアによるオペラ「ミカド」を酒田の港座と山形市で上演。その後も33年に



ボーカルスタジオの有志が編集・出版した『加藤千恵 その業績と生涯』。

「フィガロの結婚」、39年に「椿姫」といずれも大成功を収めます。歳を重ねても千恵の音楽への情熱は冷めやらず、ボーカルスタジオでは米寿を祝うオペラを企画。しかしその合唱練習の途中に倒れ、平成3年4月、帰らぬ人となりました。その年の冬、門下生は追悼公演としてオペラ「フィガロの結婚」を上演。ボーカルスタジオも継承され、千恵さんが育てた合唱団の一つ「コープロモ」は創立77年を迎えた今も活動を続けています。「先生がされたことが素晴らしかったから、私たち門下は恵まれました。たくさん学びを得ましたが、何よりの教えは『音楽を楽しむ心』です」。

本当のよい音楽が世間に広まってほしい、そう願っていた千恵。その心を受け継ぐ人たちを、客席から笑顔で見守っているかもしれません。



1988年、酒田短期大学の前庭で開かれたクリスマスコンサートで、混声合唱団「コープロモ」の合唱を指揮。

戦後まもない酒田を音楽の灯で照らした  
声楽家で教育者の加藤千恵。  
音楽の楽しみと喜びを伝えることに情熱を傾け、  
この街に、人に、音楽を愛する心を育てました。



1904年、酒田町(酒田市)生まれ。山田耕筰の子弟の荻野綾子やオペラ歌手のオルガ・カラスロワに師事。1946年、酒田と鶴岡にボーカルスタジオを開設。門下にテノール歌手の市原多朗、故・岸洋子がいる。声楽家としてコンサートの主演・客演も多数。第1回山形新聞3P賞平和賞、斎藤茂吉文化賞、酒田市名誉市民。1991年逝去。

ある人が「酒田音楽界の母」と称した加藤千恵。「憧れであり尊敬の人。先生の一言一言を思い出して、背中を追い続けています」。数多い弟子の一人の関矢順さんは、声楽家と指導者という恩師と同じ道を歩んでいます。酒田高等女学校から東京音楽学校の師範科に進んだ千恵は、関西の女学校に着任しました。声楽家としても活躍し、NHK大阪放送局「ラジオ歌謡」の歌い手に抜擢されます。その後、宝塚歌劇団に招かれて声楽主任に。同郷で画家の加藤丈策と結婚し、2人の女の子にも恵まれました。何足もの草鞋を履いて駆け抜ける日々は、やがて戦時下へ。疎開を決め、終戦の1週間後に帰郷、住まいを杉沢(遊佐町)に設けます。



門下でイタリアに渡った金内馨子(前列左)が帰国後、酒田でレッスンをした際に師を囲んでの食事会。後列右が関矢さん。

〈参考資料〉  
岸洋子著「さくらんぼの楽譜」(報知新聞社、1983)／ボーカルスタジオ、SPOON編集部編『加藤千恵 その業績と生涯』(ボーカルスタジオ、2000)／月刊「SPOON」2000年8月号特集「ボーカルスタジオの思い出」／月刊「SPOON」スペシャルインタビュー(1991.7月号・田中善子談、1991.12月号・市原多朗談、1997.4月号・石井上子談、1999.7月号・金内馨子談)／酒田市立資料館 第216回企画展「かっこいい酒田の女たち」展示資料(2020) ほか

# 加藤千恵

音楽と人とが響き合う街に